

# 聖地・妖怪分布からみる境界空間と住民意識

— 奄美大島龍郷町を事例として —

松 井 幸 一 ・ 高 橋 誠 一

## See Boundary space and human consciousness from holy place and monster's distribution

MATSUI Koichi    TAKAHASHI Seiichi

Amami Oshima has created own unique culture, which is based on Ryukyu culture and also mixed with Yamato culture. Tatsugou-chou, a targeted research area for this paper, has mountain district and forest in the central part and villages are located on coast area and look like sticking on the island. Each village inside the island Amami Oshima is called "Shima," which means island in Japanese, since they do not have good access to transportation to other villages as if they are island. Therefore, folk culture also has different characters.

Under this nature environment, people clearly differentiate between the own village, which they belong to, and the others, which are outside different/unfamiliar world. A targeted research area of this paper is Tatsugou-chou in Amami-oshima. This paper is aim to geographically research regarding villagers' consciousness toward self-world and outside world by restoring scattering spiritual places and traditional places of infesting specters on the map

As a result of research, there is a tendency that spiritual places are mainly located on old area of the villages and each village has the spiritual place, which is called "Kamiyama."

This village constriction is with the philosophy based on "Kusate" idea, which is a traditional village constriction philosophy of Ryukyu. In addition, some cases are recognized that traditional spiritual places are incorporated in "Heike" legend and lost an original meanings. On the other hand, many of specter-infesting places are located around the outer edges of each village. One of the reasons for this tendency is due to villagers' unconscious social group consciousness. In order to differentiate

between own village world and outer village world, it is considered that legends regarding specters are eccentrically located.

Spiritual place and specter legend is representational product for view interpretation/perspective/understanding of the outer world that is resulted in social group's strong consciousness of boundary space to the outer village worlds. The environment that social group consciousness, unique "Shima" village's perspective, includes self-consciousness leads the realization/cognition that village equal to self-world and, furthermore, formation of belongingness toward village world and village-identity.

## I. はじめに

奄美諸島は鹿児島県と沖縄県の間に位置する島々である。中心となる大島本島の大部分には山地や森林が広がり、気温は年間を通して温暖で年平均気温は20℃を超え降水量も多い。高い平均気温と多雨のために湿度も高く、名瀬における過去10年間の年間平均湿度は70%を超える<sup>1)</sup>。このような高温多湿の環境は居住環境を限定し、集落は海岸部に沿ったわずかな平地に存在する。また、温暖湿潤な気候は高倉などの南西諸島特有の集落景観を形成する要因となった。

奄美諸島は行政区分の上では鹿児島県に属するが、1609年に薩摩が侵攻する以前には琉球王府が支配していた。そのため基層文化は琉球文化の影響を強く受け、往古の集落では按司とノロを中心とした政祭一致型の社会組織が形成されていた。また、集落の形成に関しても琉球と同様の「腰当」思想が指摘されている<sup>2)</sup>。現在みられる奄美文化の大きな特徴は琉球と大和の中間に位置していたこともあって、琉球文化と大和文化、2つの異なる文化が混在し変容している点にある。そのため祭祀では琉球と同様の祭祀形態が多くみられる一方で、「トネ屋」や「ミヤー」と呼ばれる沖縄本島では見られない奄美独特の祭祀景観も存在する(図1)。

「トネ屋」は一見すると普通の家屋であるが、その本質は祭祀をおこなう特別な空間である。このような特殊な形態になったのは従来、家の外でおこなってきた祭祀が薩摩侵攻後に弾圧されたために、民家形態の家屋の中でひっそりとおこなうようになった結果である。「ミヤー」も本来は祭祀空間であったが、現在は公民館が置かれることが多く、集落の公有地としての性格が強くなってきている<sup>3)</sup>。このように薩摩による統治はそれまでの基層文化であった琉球文化の

1) 気象庁気象統計情報, <http://www.jma.go.jp/jma/menu/report.html>, 閲覧日2009年12月9日。

2) 長澤和俊編『奄美文化誌 南島の歴史と民俗』, 西日本新聞社, 1972, 242頁。

3) 仲松弥秀『神と村』, 梟社, 1990, 190~202頁。

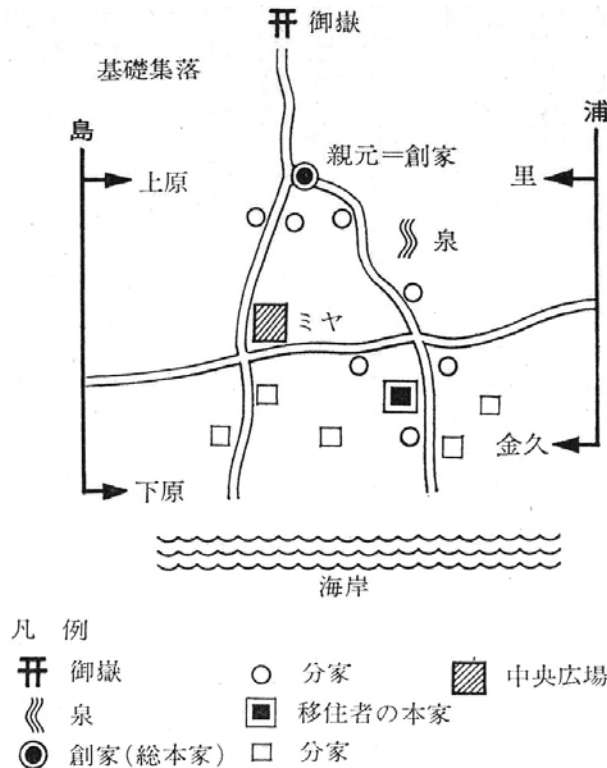


図1 奄美の集落形態（長澤1974、95頁より引用）

変容を招き、奄美独自の民俗文化を発展させる契機ともなった。

現在はトンネルの開通などによって昔に比べれば大幅に交通の便は良くなっているが、中央部に山地や森林が広がるために各集落間の移動は未だに限定される。このような島内の各集落は「シマ」とも呼ばれ、交通が不便な点からもまさしく各集落一つ一つが独立した「島」のようである。そのため民俗文化でも集落固有の8月踊りやシマ唄の存在など、集落ごとに異なる特色をもつ。特に、交通が難易であった時代には集落間で多少の交流はあったとしても、住民にとってはシマの内側で生活が完結することが多かった。そのためシマの外は他世界という認識が現在に比べてより強かったであろう。

シマと他世界を区分する境界線あるいは境界帯は様々な意味を内包し、境界の多くは山や川などの境となる場所、あるいは住民にのみ認識できるわずかな自然環境の境に設定されている。境界の持つ意味は様々あるが、最も住人の生活にかかわるのは行政界区分としての境界である。奄美諸島のように山間部に集落が点在する場所では、行政界は住人にとっても漠然としていて、

感覚としては明瞭な境界線としてよりも境界帯として捉えられよう。では、境界とはそもそもどのような意味を持つ地域なのか。

千田は「山口」における山地と平野における境界を考察し、「山口」における境界の意味論はその場所がどのように知覚されていたのかの問題であると提起した<sup>4)</sup>。さらに、「山口」の境界帯では社が多く分布していることから、「山口」は自然と文化の両義性を持つ空間で、それは「山口」という境界帯がおのずから携えている空間的特性にかかわる問題であり、「山口」は単なる山と平野の接触地でなく多義的な意味を持つ事を指摘した<sup>5)</sup>。つまり、古代の境界に対する認識は現在より民俗・文化的な境界としての意味が強かったといえる。

一方、琉球地域では、大和と琉球の基層となる民俗・文化が大きく異なるため、境界に対する認識にも違いがあると考えるのが妥当であろう。ここでは村武が示した琉球社会の秩序を基にして、琉球における境界認識について考えてみたい。村武は琉球村落の社会的・象徴的秩序として7つの秩序を提示し、最も外側の世界は他界（異世界）であるとした<sup>6)</sup>（図2）。実際にかつての琉球集落の特徴を考えると、生活のほとんどはシマ内で完結することから集落外側の世界は異世界といえる。集落世界と異世界の境界は行政界に比べると個々が持つ民俗・文化的な認識がより強く概念的なものである。特に、指標となる自然環境がない場所では、住民にとっても集落世界と異世界の境界は漠然とした地域で、各住民によっても境界地域に対する認識は異なる。奄美のような集落の周囲を山が取り囲むような地域ではなおさらその特徴は顕著であろう。つまり、シマ世界を生活の中心とする琉球地域の集落境界は、他に比べて一層、民俗・文化的な側面が強いと考えられる。

では、住民が想像する異世界とはどのような場所なのか。折口によれば日本古代人は異世界（他界）について、「我々生類の住んでいる世界から、相応の距離があり、人間世界と、かなり隔たっているが、全く行った人もなく、出向いて来た生類もいなかった訳ではなかった。…船路の惑いや、或はまぐれあたりに、彼地に漂い着いたり、極めてたまにはそこの「神聖者」から呼び寄せられたとは知らず乍ら、この他界に到着した場合もある」と、生活空間のすぐそばに異世界が存在すると考えていたと指摘する<sup>7)</sup>。

また、佐々木は風景を3つに区分して①誰にでもみることの出来る風景②ある人、ある時に

4) 千田稔『風景の構図——地理的素描——』, 地人書房, 1992, 69~87頁。

5) 前掲4) 69~87頁。

6) 村武精一『神・共同体・豊穰』, 未来社, 1975, 368頁。

7) 折口信夫「民俗史観における他界観念」(折口信夫全集刊行会編『折口信夫全集20』, 中央公論社, 1996), 19-72頁。

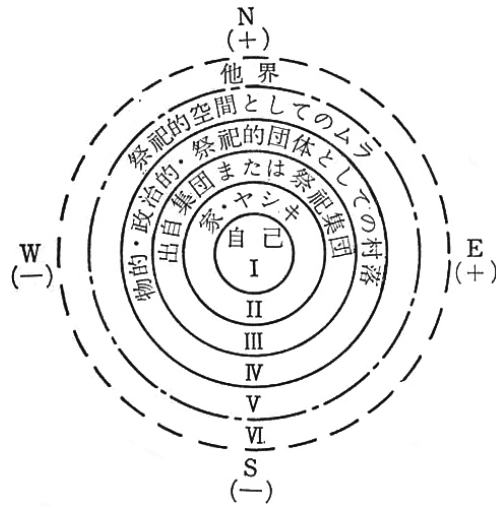


図2 琉球村落の社会的・象徴的秩序  
(村武 1975より引用)

しか見えない風景③人や時によっては、そこに見えるはずのないものが見える風景、があると指摘した。そして「実在する風景を背景に、実在しない風景が重なって見える」風景が「怪異の風景」、つまり異世界の風景であると定義した<sup>8)</sup>。

人々が抱えるこのような異世界観を踏まえると、異世界とは生活空間と近接し、実世界と一部重なるような非日常的空間であるといえる。したがって、集落の境界空間は実世界と異世界が重なる場所で、そこには住民が集落と異世界をどのように意識していたのかという内面的な問題を含む場所でもある。

ところで、境界となる明確な指標が少ない環境では、境界はどのように設定されてきたのか。柳田は境界としての役割を持つ一例として道祖神を挙げ、道祖神の役割は邪悪神を阻塞して集落の平穏を守るものと提示した<sup>9)</sup>。他にも多くの集落で入り口にしめ縄を張り結界とする事例がみられる。道祖神やしめ縄などの事例は、集落と異世界の間に明確な境界が存在していることを示し、誰から見てもそこが境であると認識可能な人為的な境界を住民自身が設定していた事例であって、どのような環境でも常に住人は自身が所属する世界と異世界を意識していたのである。

8) 佐々木高弘『怪異の風景学 妖怪文化の民俗地理』、古今書院、2009、1-17頁。

9) 柳田国男『石神問答』創元社、1941、109-110頁。

このように例え明確な指標が少ない空間でも住民は現実世界と異世界を区別しようとしてきたのである。それは自らが所属する社会集団とその他の世界を区別しようとしたともいえるだろう。

つまり境界空間と社会集団意識は内在意識を通じて相互に影響を与える関係である。そこで、本稿では奄美本島の龍郷町を事例として、閉ざされたシマ空間の住民がシマや境界空間をどのように認識していたのかについて境界空間と社会集団意識の考察から明らかとしたい。具体的な考察の対象は龍郷町内の聖地と妖怪出没地の分布である。両者の分布から住民の持っていた境界空間に対する認識とそこに潜在する社会集団意識を考察していく。

## II. シマの町龍郷

龍郷町は大島本島の北部に位置する人口約6000人の町で、町の東部と西部を奄美市（旧笠利町と旧名瀬市）に接する。面積は約80km<sup>2</sup>だが林野部が総面積の80%を占めており町内の大部分は山地である。町内には西部・中央・東部の3つの山系があり、西部山地は龍郷町西部の大部分を占めるため東西交通の妨げになっている。特に町内北部への主要交通は海岸部を通る道路が主要な交通路で交通の便は良くない。町内の中央部を山地が占めるため、各集落は町内の周縁部に点在するような分布となる。各集落は住民基本台帳の上では19地域に区分されるが、生活基盤を同一とする村落共同体という観点からみると大きく分けて15のシマが存在し、それぞれが固有の特色を有している。

### (1) 民俗行事にみる境界空間認識

龍郷町のシマの中でも特に秋名集落と幾里集落<sup>10)</sup>は最もシマ特有の民俗的な行事が残っているとされる。その最も代表的行事である平瀬マンカイは毎年旧暦8月の丙におこなわれる年中行事で、昭和59(1984)年に国による重要無形民俗文化財の指定を受けている。もともと平瀬マンカイは特定行事ではなく集落ごとにおこなわれる年中行事の一種である。しかし、現在は後継者不足などにより他集落では行事そのものが継承されず秋名・幾里集落に残るのみとなった。

平瀬マンカイは「稲玉」を海の彼方から迎える稲作儀礼である。行事の中心となる女性は海に向かって「稲玉」を手招きするような動作をおこないながら神歌を謡う。この所作は海の彼方の世界から住人たちの生活する世界へと「稲玉」を招来することを表し、ここには海岸線を一

10) 秋名集落と幾里集落の起源は異なるが、両集落の拡大にともない実質的に一つの集落として機能しており、現在は年中行事も両集落合同でおこなう。本稿では両集落を便宜的に一つの集落として記す場合には秋名・幾里集落と表記する。

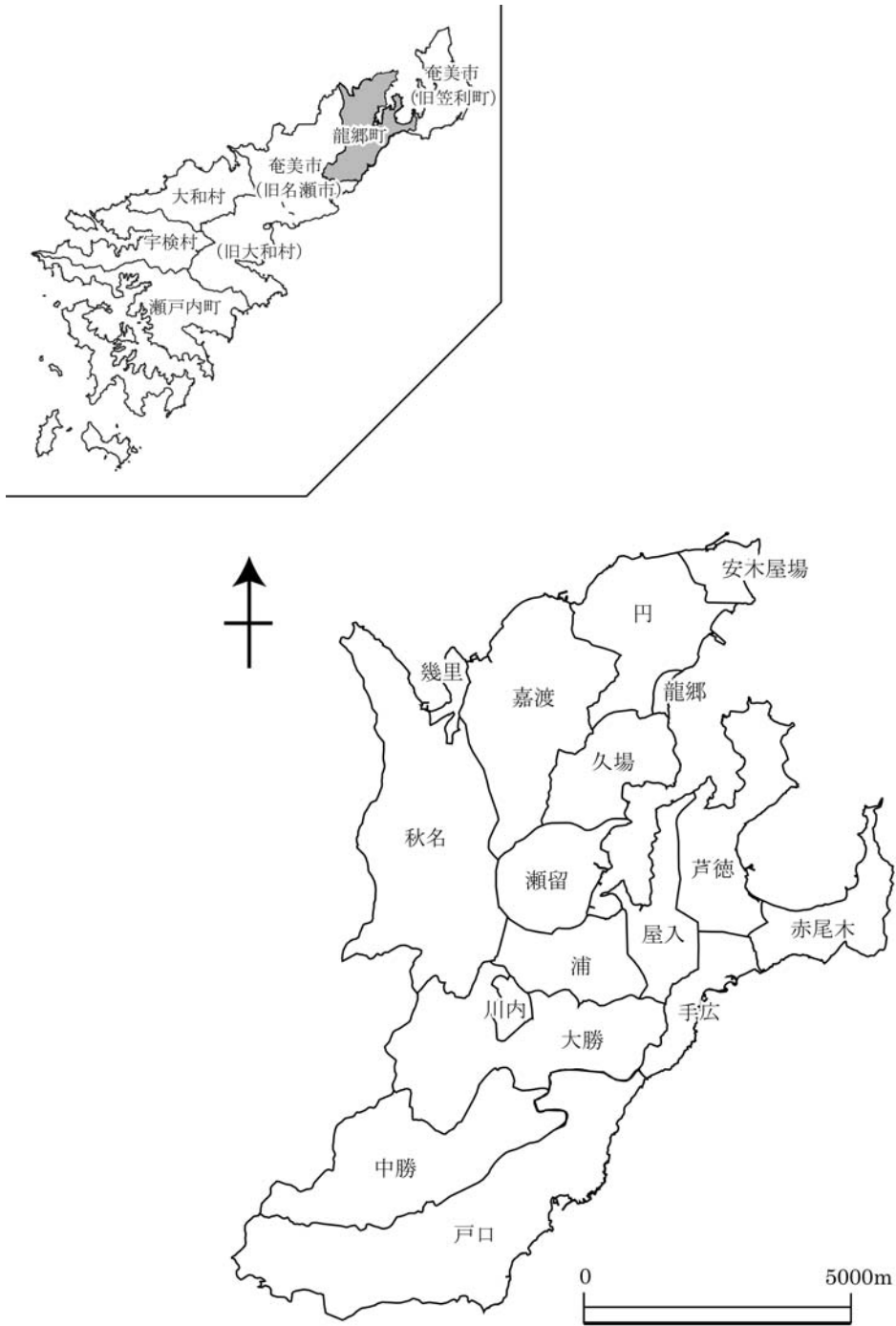


図3 龍郷町の概要  
平成17年国勢調査境界データに加筆



つの境界空間とした住民のもつ異世界観が垣間みられる。

琉球文化圏では海の彼方と陸地を別世界と捉える考え方が広く普及している。例えば常世であるニライカナイは海の彼方にあり、ニライカナイの神や農作物の豊作もそこからもたらされると考えられていた。琉球一帯で2月から6月にかけて広くみられる、ムシバレーやアブシバレーと呼ばれる田畑の害虫を集めて海に流す年中行事も同様の異世界観の表れであろう。例えば渡名喜島のこの行事では「虫ハネーヤウトルシムン、ウー虫ムントーヌシマ、ムルクシヌシマニ、ウシヌキティタボーリ」と唱えて害虫を流し<sup>11)</sup>、災いを元の世界へ返すという意味を持っていた。この祭祀では住民にとっては好ましくないものも外界からは渡来する。つまり住民は海の彼方の世界を単なる理想郷として捉えるのではなく、様々なものが入り乱れる異世界として認識していたのである。

## (2) 集落近辺に出没する妖怪

世界の多くに妖怪に関する伝承が残り、それらは全くの空想空間や現実空間の一部、または両者が混在する空間など様々な場面において語られる。佐々木は現実空間と空想が混在した「怪異の風景」とは「目撃者がある未知に遭遇し、その内面にある主観的で、元型的な内容を、眼前の風景に投射し、その風景と同一化したものとして映じたもの」であり、それは当該社会の世界観によって提供されると定義している<sup>12)</sup>。つまり、妖怪が現実空間と重なって見られるのは、目撃者の個人的な感性のみならず、その時代の社会・文化的な世界観が表象として表れているのである。したがって、奄美のシマ集落到数多く残る妖怪伝説は、寓話や奇譚として捉えるだけでなく、そこには奄美文化が具現化していると考えべきであろう。

奄美の妖怪に関する伝承記録として、まず挙げられるのは「南島雑話」である<sup>13)</sup>。そこには大蛇や天狗など日本各地の伝説と同様の妖怪がいる一方で、奄美諸島特有の「ケンムン」と呼ばれる妖怪（水輻と宇婆）が記されている。「ケンムン」についての記述は以下の通りである<sup>14)</sup>。

11) 渡名喜島ではムルクシヌシマ（唐国）という具体的な地名が唱えられるが、ここでは海の彼方の世界という認識である。崎原恒新『沖縄の年中行事』、沖縄出版、1979、64頁。

12) 前掲8) 1-87頁。

13) 南島雑話は嘉永3（1850）年から安政2（1855）年まで奄美大島に滞在した薩摩藩士、名越左原太が現地で見聞した事柄を詳細に記録した民俗誌。名越左原太著、国分直一・恵良宏注『南島雑話』、平凡社、1984。

14) 水輻と宇婆はその姿もよく似ており、両者は同一のものである。恵原義盛「奄美のケンムン」（谷川健一編『日本民俗文化資料集成 第八巻』、三一書房、1988）、259～298頁。





図4 奄美のケンモン（南島雑話より引用）

水輻（カタワロ、山ワロ）：好て相撲をとる。適々其形をみる人すくなし。且て人にあだをなさず。却て樵夫に随い、木を負て加勢すと云。必ず人家をみれば逃去。住用の当幾に尋て図す。

宇婆（水輻一種）：宇婆はケンモンの類にて、折々嶋人迷ひし方に、山野に引まよはず事有。南島雑話に出てくるケンモンは、相撲を好む点や頭上に皿がある点など、生息地が山か川かの違いはあるがさながら河童のようである（図4）。また、単に見えるというだけでなく、実際に人の手助けをしたり、人を惑わしたりと現実世界に干渉している。

ケンモンは現実世界のどこに出没するのだろうか。金久によれば、ケンモンはヒジャと呼ばれる山頂の平斜地に現れる<sup>15)</sup>。そこは村落の前哨地で、山間の正規路はなく磯伝いか小舟によってのみ行く事ができる場所である。一方、宇婆は集落から集落に通じる山路の中間の峠辺りのナガネ（長根、長峰）と呼ばれる山間の平坦路付近に現れる。宇婆もケンモンの一種と考えると、ケンモンは集落と隣接する山の中に出没するといえる。そのような場所は往々にして生活空間と非生活空間の境界地域である。このような場所は住民の生活空間からは一定の距離があ

15) 金久 正「ケンモン」と「ウバ」（谷川健一編『日本民俗文化資料集成 第八巻』、三一書房、1988）、235～242頁。

り、住民がよく知っている場所でもないが、全く知らない場所でもない。そのような、住民が持っている空間認識の狭間にケンムンは出没するといえる。

### (3) 龍郷町の妖怪

ケンムンの他に龍郷町内にはどのような妖怪が現れるのか。表1は龍郷町内の妖怪伝承につ

表1 出没妖怪の種類

集落	妖怪	備考
秋名・幾里	牛ックワ	—
秋名・幾里	クビキリヤマ	首切れ馬
秋名・幾里	女性の霊	—
秋名・幾里	クビキラウワ	首切り豚
秋名・幾里	ウワックワ	子豚の妖怪
嘉渡	記録なし	—
円	記録なし	—
安木屋場	鎧武者	神道に出没
安木屋場	ケンムン	山間の平地・集
安木屋場	クビキラウワ	落との境に出没
龍郷	記録なし	—
久場	記録なし	—
瀬留	ケンムン	集落の外れに出没
浦	ケンムン	—
大勝	クビキラウワ	首切り豚
大勝	ケンムン	—
大勝	牛の霊	屠殺場に出没
大勝	女性の霊	—
川内	ケンムン	—
川内	霊	—
中勝	記録なし	—
戸口	首切り伝説	集落の境
戸口	子牛の霊	集落の境
戸口	平家の亡霊	神道に出没
戸口	妖火	山に出没
戸口	ウワックワ	子豚の妖怪
戸口	マジムン	悪霊
屋入	ケンムン	—
屋入	女性の霊	—
屋入	サン	馬に似た魚
加世間	記録無し	—
手広・根原	ケンムン	—
赤尾木	記録無し	—
芦徳	クビキラウワ	首切り豚
芦徳	ケンムン	—

龍郷町誌（1998）より作成

いて町誌をもとにまとめたものである。表中ではシマ単位で分類しているため、集落同士が近接し住民がほぼ一体と認識している集落は一つのシマとして扱っている。全17のシマのうち妖怪伝承が残るシマが10地区、記録がないシマが7地区であった<sup>16)</sup>。

町誌では妖怪に関して特に項目を設けて調査しているのは秋名・幾里地区だけである。他地区では地区内の個別地点を説明する際に妖怪出没を挙げる形式をとっているため、妖怪に関する詳細な言及が無い事例も多い。また、妖怪出没に関して「記録なし」となっている地区でも、隣接地区の調査では集落の境に妖怪が出没するとの記述があり、実質的には両地域にまたがって妖怪は出没している<sup>17)</sup>。したがって地区によって調査事項の詳細が異なる点も考慮すると「記録なし」となっている地区でも実際には何らかの妖怪伝承があったとするのが妥当であろう。

妖怪の種類をみると一般的なケンムン以外にも、牛や豚の霊が多くみられる。これらの多くは首無しであるのが特徴である。秋名・幾里の首切り豚に関しては、股の下を潜られると命を取られるため股を潜られないように足をX字型にして歩かなければならないという伝承が残る。似たような伝承は他の首切り豚伝承にもみられ、股を潜られると命をとられるのが首切り豚の特徴である。他に人間に関する首切り事例としては戸口の集落境に残っている。

また、奄美諸島には平家落人に関する伝説が多く残ることから、鎧武者や平家の亡霊のように平家に関する幽霊伝説がみられるのもこの地域の特徴の一つであるといえよう。

### Ⅲ. 集落の空間構造と聖地・妖怪出没地

奄美の伝統的集落の空間構造は他の琉球地域と同様に「腰当」思想を基盤とする。現在でも伝統的な聖地が多く残るが、それら聖地と集落の空間構造の関係はどのようになっているのか。さらに、妖怪は集落のどのような空間に現われるのか。ここでは聖地と妖怪伝承が比較的多く残る秋名・幾里集落、大勝集落、戸口集落を対象として現在の住宅地図をもとに聖地と妖怪出没地を復原し、集落空間構造と聖地・妖怪出没地の関係を考察する。

#### (1) 秋名・幾里集落の事例

秋名・幾里集落は本来、秋名と幾里で個別の集落である。しかし、現状は両集落の拡大に伴

16) 表1は町誌記載の地域単位のため、図2で示した地域単位とは若干の違いがある。表1中でみられ、図2にみられない加世間は手広地域に含まれる。龍郷町誌民俗編編さん委員会編『龍郷町誌 民俗編』、鹿児島県大島郡龍郷町教育委員会、1988、1073頁。

17) 表1中では「記録なし」となっている円、嘉渡、久場、浦、中勝、赤尾木では隣接地区の伝承によると集落境に妖怪が出没している。

って集落同士が極めて近接した結果、一つの集落のようになっている。町誌でも秋名・幾里で一つのシマとして扱われ、コミュニティセンターも共同であるなど住民にとっては秋名と幾里で一つのシマ集落としての認識が強い。

秋名の集落は里と呼ばれる西部の山裾から始まり、その後、金久と呼ばれる海岸部に拡大したと伝わる。一方、幾里集落はアガレと呼ばれる東部の山裾が発祥の地である。集落は龍郷町の中でも昔から大きく小那覇と呼ばれるほど栄えていた。前述したように秋名・幾里集落は龍郷町内で最も民俗的な行事が残る集落として知られ、豪農の屋敷地や琉球石垣が残るなど、今なお往時の面影が垣間見られる。また、集落には聖地とされる場所が現在も点在し、龍郷町で最も往時の生活空間が残る集落といえる。

町誌記載の秋名・幾里集落の伝統的な聖地と妖怪出没地は以下のとおりである。

・フヤ (図6-①)

現在、2軒の人家があるが、もとは1軒で屋敷の北西にノロ屋敷があった。フヤには馬の角があったといわれる。

・ウドン (図6-②)

金久の東端にある敷地。神道は金久のノロヤシキから人家や道路と併用、または人家の間を通りここに至る<sup>18)</sup>。戦前までは高倉が5～6棟あり、八月十五夜の秋名・幾里合同の相撲もここでおこなわれた。奄美の祭祀空間の特徴としてミヤーと呼ばれる神事空間がある点が指摘されてきたが<sup>19)</sup>、ここで相撲がおこなわれていた点からもこの空間が以前はミヤーとしての意味をもった聖地であったと考えられる。

・平瀬マンカイ祭場 (図6-③)

平瀬マンカイと呼ばれる祭祀がおこなわれる場所。

・ショチョガマ祭場 (図6-④)

ショチョガマは戦時中一時中断していたが戦後に復活し、しばらくは里・金久・アガレの3集落でともにおこなっていた。祭場はいずれも集落の南部、小高い山の中腹の田袋(田んぼ)が一望できる場所に位置する。現在は、金久だけがおこなっている。

・ピンツル (図6-⑤)

里の南側にある幅13cm、高さ15cm、厚さ8～15cmの自然石。昔は背後のグスク(山の名)にあったが、下におろしたとも伝わり、道路の改修工事によって現在地に移された。雨乞

18)「神道」とは祭祀の際に拝所と呼ばれる祭祀空間を巡る道程を指す。

19)ミヤーは祭祀空間の一つであるが、現在では神事性が薄れて村の催し場となることが多い。前掲3)190～202頁。



図5 テンツ

いの神として信仰される。

・テンツ（図6-⑥）

テンツ山またはテンツ森ともいう。戦後しばらくは小さな鳥居や祭場の跡があり、祭場跡にはきれいな石があった。アガレから神道がテンツ山までつながっているともいわれる。テンツの最上部周囲には掘割があり、掘割伝いにテンツモリを一周できたといわれる（図5）。

・巖島神社（図6-⑦）

昔はオミヤと呼ばれ、アガレに流れ込むヒゴ（川の名）の上流にあった。しかし、いつ頃からか不明であるがブウン崎に移転された。ブウン崎にあったころはテラと呼ばれ、隣接する集落からも参詣者がいた。現在地へは昭和35年旧一月に移転された。

・ノロ屋敷（図6-⑧）

フヤの北部、西側の片隅に昭和初期ごろまで小さな家があった。カミヤシキとも呼ばれていた。

・ネトロ（図6-⑨）

カミヤシキ、ノロヤシキ、ナアドノチとも呼ばれる。

・ノロ畑（図6-⑩）

里の南部にある畑。ノロについてまわる畑、神様の畑などと伝えられ、代々のノロが継承した。

・ノロ屋敷（図6-⑪）

アヤというノロが住んでいた場所。八月十五夜の相撲には金久の若者たちはここに集まっ

てからウドンにいき相撲をとった。

・神道 (図6-12)

人家と人家の間に残る幅50cmほどの通路。金久南部にあるノロヤシキから住民の屋敷内を通り、ここを歩いてウドンに至る。

・カミヤシキ (図6-13)

アガレにあり、ノロヤシキともいう。明治40年頃までは祭祀をおこなう小さな家があり、金久からもノロが来て祀っていた。アシャゲからの神道はここにつながる。

・カネヤマサマ (図6-14)

昔から恐れられた場所で、チュヤマシュントロともいわれた。神道はここからノロヤシキに通じていたという。

・アシャゲ (図6-15)

昔はノロの地であった。八月十五夜の相撲にはアガレの若者たちはここに集まり、ノロから神酒をもらい金久のウドンに行った。

・ウヌヤシキ (図6-16)

アシャゲのノロに継承される地であった。神道はここにも通じていた。

・グスク

里の南部にある山頂。(図6-17)

・アシマタザク (集落地名) (図6-18)

昔から怖い所といわれ、牛ツクワ (牛の霊) が出たと言われる。

・コモリ (場所不明)

秋名と嘉渡の旧道の頂上付近には、天水をためて甘藷の種苗をつけたりする大きなコモリ (水たまり) があり、首切り馬が出るといわれ、火をつけて歩くと火を消されるといわれた。

・イキャナ (場所不明)

旧名瀬道のイキャナという所では、女の人の声が聞こえるといわれる。昔、男性が非常に美しい女性とナガバスケ (集落地名) 付近で一緒になり同道したが、気がつくといキャナの尾根で体中をカズラでまかれていたという。

・金久のはずれ (図6-19)

金久のはずれの橋の付近で首切り豚が出る。

・ウヌヤシキの下 (図6-20)

アガレのウヌヤシキの下付近で首切り豚が出る。

・カミヤシキ付近 (図6-21)

アガレのカミヤシキ付近で子豚の妖怪が出るといわれる。股を潜られると命を取られるといわれ、昼でも恐ろしい場所であった。

以上の聖地と妖怪出没地を現在の地図上に復原したのが図6である。

まず集落空間における聖地分布の意味を考えたい。琉球文化圏の集落形成は「腰当」と呼ばれる形成理念に基づく。集落の背後には基盤となる「腰当森」があり、その中に御嶽を有する<sup>20)</sup>。伝承や聖地の性格からアガレの「腰当森」として可能性の高いのはテンツとカネヤマサマの2つの神山である。奄美諸島の神山には御嶽に相当するものと、祭祀者によって意図的に神山とされたものの2種類がある<sup>21)</sup>。両神山とも神道を通じ、拝所としての機能を持ち、どちらが初期集落の「腰当」であったのかを判断するのは難しい。判断要因の一つとして集落内の墓地にある墓石の向きをみると、アガレや里住民の墓石は「山田向け」といわれ、テンツモリの東部、山田川上流付近に向かって建てられている。これを御嶽に対する一種の遥拝であると考えれば、テンツモリが「腰当」としての機能をもった神山で、カネヤマサマは住民による意図的な神山であるといえるだろう<sup>22)</sup>。一方、里周辺には神山が存在しない。そこで、他の「腰当」となる聖地を探すと、里南部のグスクと呼ばれる聖地が想定される。一般にグスクと呼ばれる場所は首里城や今帰仁城などに代表されるように、防御機能のみでなく、そこには拝所や聖地が含まれていることが多い。仲松は城的に変化した城のみならず、グスクと呼ばれる空間の多くには人骨が埋葬されていて古代祖先の共同葬所（風葬所）であることを指摘した。城的なグスクはグスクを保護していた豪族が隣接して居館を建て石垣囲いにした結果、城のようになったと推測しているのである<sup>23)</sup>。グスク空間が祖先の葬所であって「腰当」になりうるという視点からみれば、里南部のグスク空間も「腰当」としての機能を持っていたと考えられる。それを裏付けるように昔、秋名・幾里地区のテンツとグスクに陣取った集団同士が争い、グスク一帯には米倉があったという伝承が残る。この伝承からはかつて両所が城的に利用され、集落として機能していたことがうかがわれる。したがって、里南部のグスク周辺が「腰当」としての機能をもっていたと推測できる。

他の聖地に目を向けると祭祀者であるノロにまつわる聖地が多くみられる。李氏朝鮮の史書

20) 腰当森とは集落背後にあり、集落神が鎮座する場所。前掲3) 18-29頁。

21) 仲松は奄美諸島の神山について2つの種類があるため、一つの集落に2つの神山がある場合は見極める必要があることを指摘した。前掲3) 91-94頁。

22) 移動村落では旧集落があった場所に対して遥拝がおこなわれる事例がある。仲松弥秀『古層の村・沖縄民俗文化論』、沖縄タイムス社、1977、163-189頁。

23) 前掲3) 85-91頁。



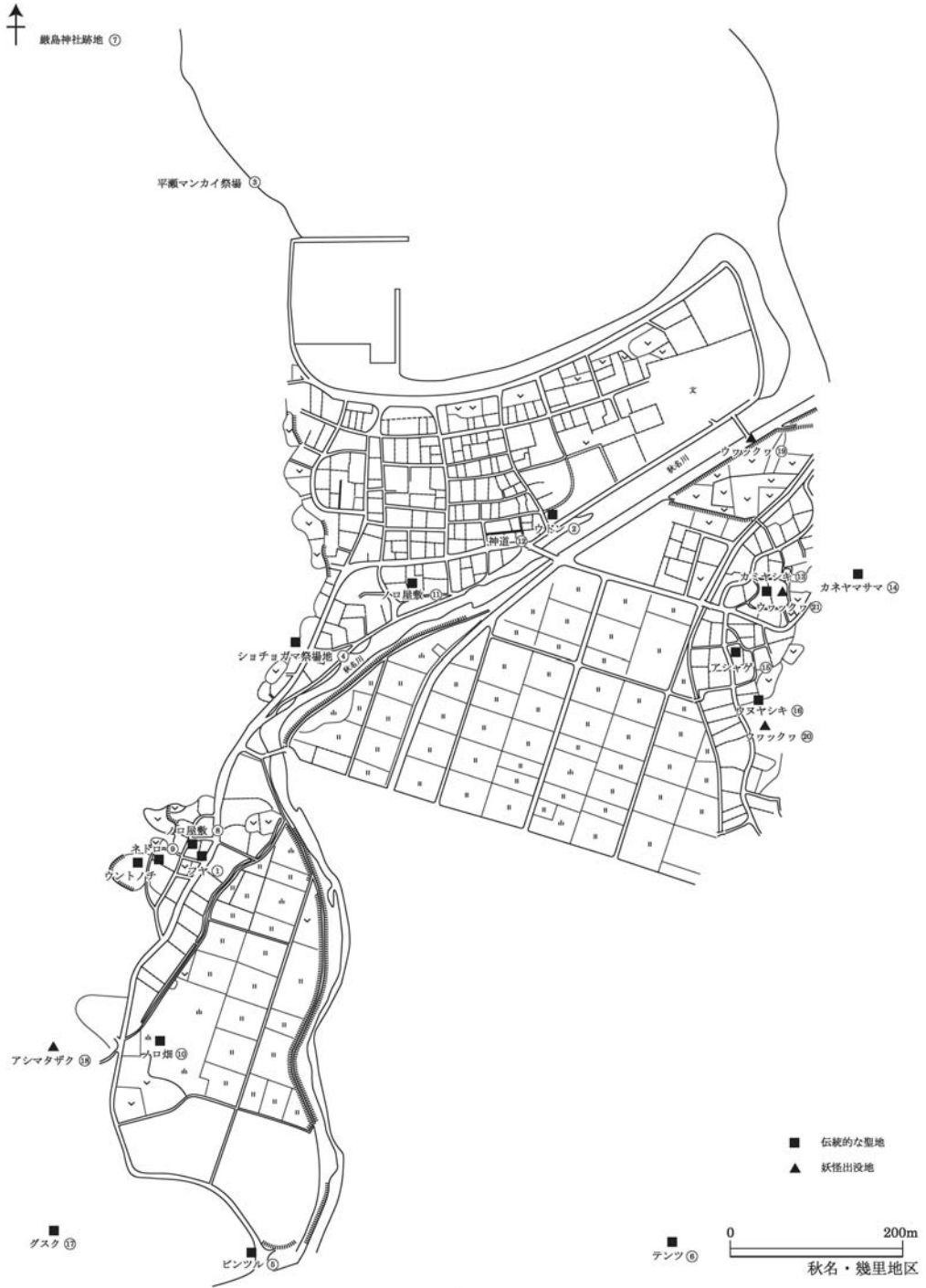


図6 秋名・幾里地区の聖地と妖怪出沒地

『李朝実録』によれば、15世紀前半には奄美諸島は琉球国の支配下にある<sup>24)</sup>。したがって、この前後には奄美の祭祀社会も琉球の聞得大君を頂点とする祭祀組織に組み込まれ、ノロにかかわる聖地は祭祀上重要な位置を占めていたと考えられる。ノロの聖地は里とアガレに多く確認でき、古くから両地域が祭祀上の中心地であったことを示している。特に、里ではウントノチと呼ばれる豪農（士族格）屋敷周辺にノロ屋敷が集まり、一帯の政治的・祭祀的中心性の高さをうかがわせる。アガレでも同様に、カミヤシキ、アシャゲ、ウヌヤシキが集中しており、祭祀者が一定の場所に集中して居住していたことを裏付けている。

ノロ聖地以外の伝統的な聖地空間もいくつか残っており、厳島神社もその一つである。かつての厳島神社は現在より約1500m北の山中にあった。町誌によれば、そこはテラと呼ばれ隣接集落の住民も訪れ、御神体の石像には武士の名前のような奉納者25名の名前があるという。琉球にはテラもしくはティラと呼ばれる聖地が幅広くみられる。仲松によれば、そのような場所には人骨があるのが一般的で祭祀場としての機能をもつ<sup>25)</sup>。以前の名称から考えて、厳島神社の事例も本来は琉球文化の伝統的な聖地であったテラが大和文化を受容する過程で混じり合い、本質的な意味が変わり神社となったと考えるべきだろう。

続いて妖怪出没地の分布をみていく。牛クワが出るアシマタザクは里の聖地が集中する南側にあり、一帯は人家もまばらで南側は畑地となっている。ノロが有力家系から出る事を踏まえて、ノロ聖地が集中する場所を初期集落の中心とすれば、アシマタザクは初期集落空間の中ではずれにあたる。

クビキリヤマが出没する場所は秋名・幾里集落と隣接する嘉渡集落を繋ぐ旧道の頂上付近、いわゆるナガネと呼ばれる場所で一般にケムムの出没地とされる場所である。同様に女性の霊が出るとされる場所も集落間を繋ぐ場所である。さらに金久（海岸部）の辺縁部にもクビキラウワが出没する。これらは集落周縁の境界付近に妖怪出没伝承が残っている事例といえる。

アガレのウヌヤシキ、カミヤシキ付近に出没する首切り豚、子豚の妖怪の出没地にはどのような意味があるのか。ウヌヤシキはノロが継承する地であったといわれる。この地にはアシャゲからの「神道」も通じていた。カミヤシキはノロヤシキとも呼ばれ、「神道」はここにも通じる。ここでは神様の姿が見られたり、投石の音が聞こえたりするなど不思議な現象があるという。この2つの場所はともにノロに直接的に関係する場所で、「神道」が通じるなど祭祀の中心

24) 『李朝実録』には寛正3（1462）年の記録として「攻戦国東有二島一日池蘇一日吾時麻皆不降附吾時麻則攻討歸順今已十五餘年池蘇則毎年致討猶不服従」とあり、1462年の15年前1447年には奄美の一部はすでに琉球王府の支配下にあった。末松保永編『李朝実録 第十三冊』学習院東洋文化研究所、1957、468頁。

25) 前掲3) 102-105頁。

的空間としての意味をもつ。したがって、祭祀空間としての清浄性や禁忌性を持つ場所に妖怪が現れる事例といえよう。

## (2) 大勝集落の事例

大勝集落は名瀬市へのバイパスが開通するまでは名瀬の出入り口として機能した集落である。かつて浦・戸口・奥間・古里とともに瀬名方と呼ばれたころの中心地でもあった。そのため人々の往来が頻繁で、一般的にシマ社会が一つの世界を堅持し閉鎖的傾向であるのに対して、大勝集落は排他性が少ないといわれる<sup>26)</sup>。集落の景観は明治期の大規模な火災や、集落を流れる大美川の改修工事などを契機として大きく変容し、集落内の伝承も昔に比べると少なくなったといわれる。

聖地に関してはあまり多くの伝承が残っておらず、聖地とされるのは集落西側の現大木山神社(かつてはティラ山と呼ばれる、図7-①)や神道(図7-②)程度である。大木山神社の本来の名称はウギ山(拝み山)と呼ばれていたのが、後に大木山の字を当てられたといわれる。神社が建設されるまでは「オティラ」とも呼ばれていた。これは秋名・幾里地区の巖島神社の事例と同様に、もとはティラとしての伝統的な祭祀空間が大和文化の伝播によって神社へと変容した事例といえる。このティラ山からの神道が至る場所が旧カイバ(会場、図7-③)と呼ばれる集落唯一の共有地である。ここはカイバと呼ばれる以前は、フーメンヤ(大きな家の前)と呼ばれており、周辺に有力者の屋敷があったことをうかがわせる。かつてはここに土俵があり、神事空間としての機能をもっていたことからこの空間も以前はミヤ(ミヤ)として機能した聖地と考えられる。集落の空間構造と聖地分布からみると、大勝地区は奄美特有の一つの神山・一つのミヤを聖地に持つ極めて特徴的で簡素な集落構造である。そしてミヤであった旧カイバ(カイバ)が初期中心地であったと考えられる。

一方、妖怪伝承に関しては龍郷町でも多く残る部類で、町誌によれば以下5つの場所に妖怪伝承が残る。

### ・中勝道(図7-④)

集落で最も古い道を含む中勝道のかつての姿は、道も細くまがりくねった形で、現在の半分もない道幅の両側には、キンチョ(キンチョ)が生垣のように茂り、この道の半ばには首切り豚(首切り豚)がでるといわれる。そこを通る際には、股の間を通り抜けられないように、足を交差させて通った。

26) 前掲16) 322-343頁。



図7 大勝地区の聖地と妖怪出没地

・泉（図7-⑤）

公民館裏手の泉は、かつての大美川の流路にあたりガジュマルの古木があった。そこはケンムンの通り道といわれた。

・大美川旧流路（図7-⑥）

かつての大美川の流路にはガジュマルが植えられ、そこはケンムンの通り道であるといわれた。また川辺には屠殺場もあり、そこには牛の霊がでるといわれた。

・コモリ（水たまり、図7-⑦）

集落の南側には2つの水のたまった深みがあった。そこは人家もまばらな集落はずれで霊が出るといわれた。

伝承の分布地を地図上で確認すると、首切り豚は隣接する集落への道程に現れている。集落南側のコモリも集落中心部からはかなり離れており、両者は集落の周縁部に妖怪が出没する事例といえる。

大勝集落のケンムンは泉やガジュマルの木など複数の場所に現れる。その出没地は点としてあるのではなく、かつての大美川の流路上に面的空間として存在する。

流路の側には屠殺場があって霊が出る場所でもあった。屠殺場一帯の字名は「城」で現在、そこは高台の墓地となっている。前述したように、グスクと呼ばれる場所はかつて風葬場として機能していた空間である。したがって、大勝集落の墓地がある字「城」一帯もかつては古代祖先の共同葬所であったと推測される。また、墓地とティラ山に挟まれるように人家があり、墓地がある高台は「腰当森」としての役割を果たしているともいえる。よって、この一帯は単に墓場として捉えるのではなく、かつての「腰当森」にあたる聖地空間であったと考える必要があり、墓場の霊はかつての聖地に霊が出る事例といえる。

### (3) 戸口集落の事例

戸口のシマは上戸口・中戸口・下戸口の3集落から構成される。周囲は山に囲まれて東部に平地が多く、西部は戸口川の谷間となっている。上戸口から峠を越えて名瀬方面へ続く山道が残るなど、古くから交通が盛んな地区でもある。

奄美諸島には平家伝説が数多く残るが、その主舞台の一つとなるのが戸口である。そのため地区内には平家に関する聖地が多い。ところが、平家伝説に関する集落内の聖地をみると、ティラ山や神道など琉球文化圏に幅広くみられる伝統的な聖地が平家伝説に組み込まれ、平家にかかわる聖地として認識されている事例がいくつかみられる。これらの事例に関しては、聖地の由来を詳細に検討し、平家伝説以前の聖地としての意味を注意深く検討する必要がある

う。以下、聖地を確認しつつその由来を検証する。

・ティンゴの神道 (図10-①)

大勝方面からヒラキヤマにつづいていた神道。

・ヒラキヤマ (図10-②)

ティンゴ・ナカホウ (両者ともに小字名) の間に突き出た丘。昔はモリヤマと呼ばれる。現在は、丘の中腹に巖島神社がある。

・グスク (図10-③)

ナカホウの山裾にあり、尾根の先端にある小さな丘。丘の上は平地で骨が出土する。

・ナカホウの神道 (図10-④)

ヒラキヤマ・グスク付近から平行盛神社まで続いていた神道 (図8)。

・ウグラヤシキ (図10-⑤)

山裾の海岸にある小さな平地。以前はノロによる祭祀がおこなわれた場所でもあった。昔、戸口の沖合をマジムン (悪霊) が流れていたのを見たノロが、この場所でマジムンを沖合に追い返した伝承が残る。

・ウツツ (図10-⑥)

集落東部にある小さな谷間。ここは尾根の山陰に隠れシマからみることができない場所である。昔、ノロは山裾の海岸にある小さな平地ウグラヤシキで神拝みをしていたが、天候の悪い時はここでおこなうようになり、その後、ここで神拝みを続けるようになった。この神拝みはミィハッサンと呼ばれ、春暖かくなったところにおこなわれた。



図8 ナカホウの神道



・コミグスク (図10-⑦)

シマの南側、戸口川の川向に連なるナガネと呼ばれる山並みの先端にある頂。頂には小さな道が一周するような道があり、旧暦4月にハッサンと呼ばれる祭祀がおこなわれていた。また、尾根伝いに少し西側にオデと呼ばれる頂があり、コミグスクとオデの間の尾根には人工的に切断されたホリキリと呼ばれる場所があった。ホリキリは幅2メートル深さ3～4メートルあり、祭祀をおこなった跡が見受けられる。

・ティラヤマ (図10-⑧)

シマの北側から続く尾根で、シマ西側を包むように伸びている先端のこと。ティラヤマの入り口は、樹木がうっそうと生い茂り、登り口には木製の鳥居が建てられていた。ヤマの上は少し平になっていて、平行盛神社と行盛の墓といわれる石塔が建っている。ティラヤマは昔、ウチブクロ (小字名) の神山であったといわれ、祀られていた神は男神であった。

・モリヤマ (図10-⑨)

シマの南側に連なるナガネから突き出た尾根で、周囲に比べ少し小高い。以前はモリヤマに石積みをした塚らしきものが2カ所あり、神様の拝所であるといわれた。また、この塚は侍の墓であったとも伝えられる。

まず、集落の空間構造をみると、集落基盤となる神山はヒラキヤマ、グスク、ティラヤマの3つで、それぞれが上戸口、中戸口、下戸口の「腰当」として機能している。中戸口と下戸口の神山同士はナカホウの神道で結ばれ、両地区の祭祀的な繋がりが深いことをうかがわせる。



図9 ティラ山



モリヤマは集落から1 km以上離れた南部にあり、名称からは神山の一種であると思われるが、「腰当」となる神山ではなく拝み山の一種であろう。奄美の集落空間構造特有のミヤーにあたる聖地は見あたらない。

続いて、妖怪出没地をみていく。

・ホリキリ (図10-⑩)

ホリキリはタックワヤマとも呼ばれ、大勝との境であったといわれる。山の尾根が落ち込む狭い場所で、夜一人でこの場所を通ると首を切り落とされるといわれる。

・イッチリ (図10-⑪)

県道大勝・戸口線沿いの尾根が少し出ている場所。子牛のユーレイがでるといわれる。

・ティンゴの神道 (図10-⑫)

平家の侍たちが通った道であったといわれ、白い馬に乗った平家の亡霊があらわれる。

・ヒラキヤマ (図10-⑬)

ヒラキヤマには平家の城があったといわれ、中腹には巖島神社がある。ここにはカミヤママツィ (妖火) や平家の亡霊がでるといわれる。

・マツンシャ (図10-⑭)

ヒラキヤマにあった松の下にはウワックワ (子豚の妖怪) が出るといわれる。

・ナカホウの神道 (図10-⑮)

平家の亡霊が白い馬に乗って現われる。

ティンゴの神道、ナカホウの神道はともに平家の亡霊の出没地で、戸口地区の特徴の一つである平家伝説にかかわる事例である。平家の亡霊が現われるこの場所はどうな空間なのか。二つの神道の共通点は両者ともにヒラキヤマに続く神道であるということである。ヒラキヤマについてみていくと、ヒラキヤマには平家の城があったといわれるが、それ以前はモリヤマと呼ばれていた。奄美諸島に数多くみられるティラ山、モリヤマ、オボツヤマ、カミヤマ・オガミヤマ、テラヤマ・ゴンゲンヤマなどの実態は神山である<sup>27)</sup>。特に、この戸口のモリヤマについては土器や人骨が埋蔵されていること、密林の拝み山あったとの伝説、モリ (行盛) という名称、ヒラキヤマにある行盛神社の祭詞からユキ杜という名称の聖地であったことが指摘されている<sup>28)</sup>。したがって、町誌では平家伝説と結び付けられるヒラキヤマの実態は、戸口のカミヤマで伝統的な聖地の一つであって、平家の亡霊が出るといわれるティンゴの神道・ナカホウの神

27) 小野重朗「奄美の神山」『奄美民俗文化の研究』、法政大学出版局、1982、92-120頁。

28) 前掲3) 190-202頁。

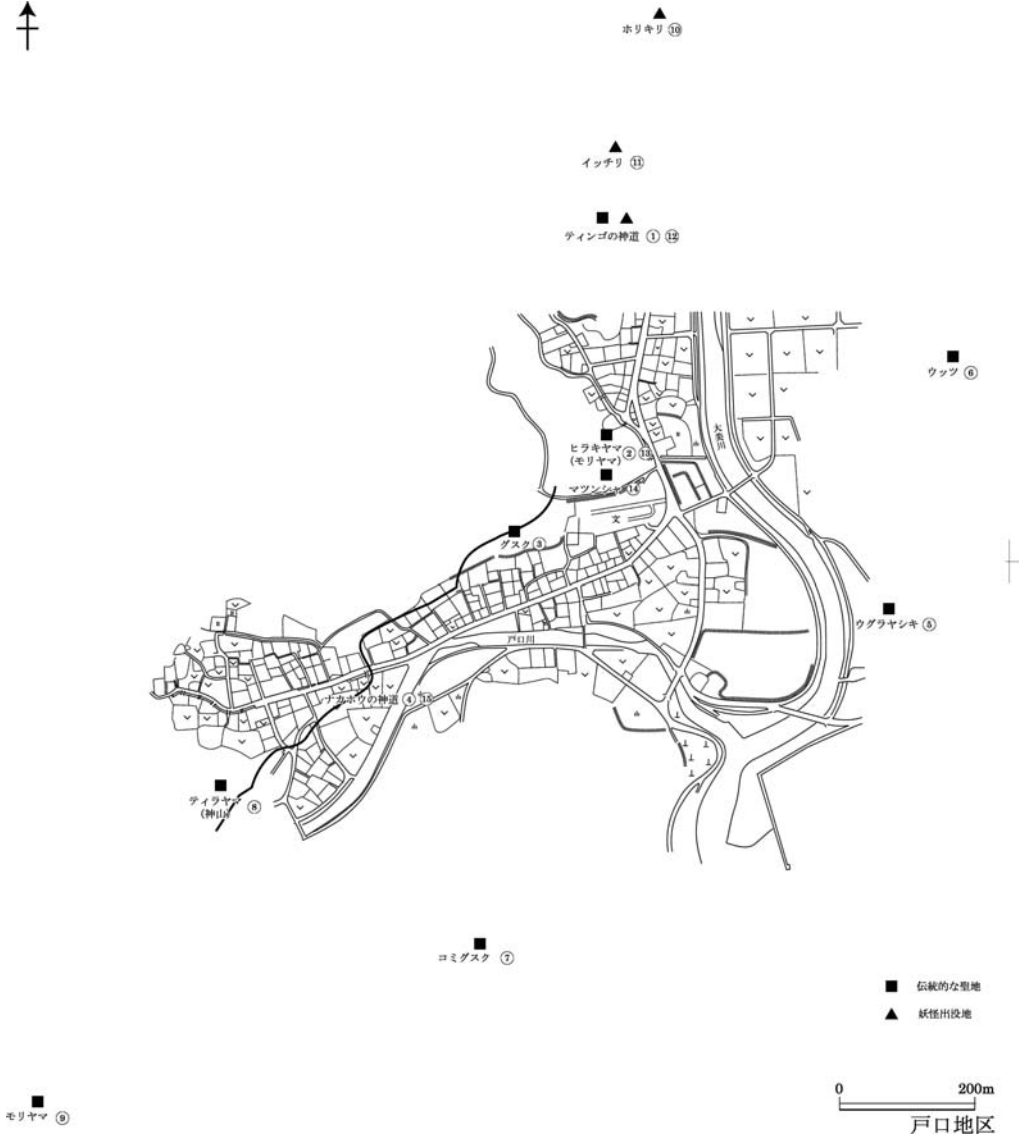


図10 戸口地区の聖地と妖怪出没地

道もその道程はヒラキヤマに至ることから平家伝説にかかわる神道とみるより、伝統的な聖地に関わる神道とみるのが妥当であろう。よって、神道に現われる平家の亡霊伝説は、伝統的な聖地として畏怖されていた空間に平家伝説が組み込まれた事例といえる。特にナカホウの神道はナカホウで最も古い道であったといわれており、祭祀・日常空間として機能していた場所が、

平家伝説に組み込まれて怪異空間に変容したのであろう。さらにヒラキヤマを伝統的な聖地とすると、ヒラキヤマ近辺に集中するカミサマツイ（妖火）や亡霊、子豚の妖怪もまた伝統的な聖地のカミヤマに妖怪が出没する事例といえる。

その他の妖怪伝承と集落の空間構造を考えると、首切り伝説が残るホリキリは隣接集落との境界に妖怪伝承が残る事例、イッチリの子牛妖怪は集落のはずれに現われる事例である。海岸の平地でノロが悪霊を退散した事例も集落はずれで妖怪が出た事例と同様である。

#### IV. 奄美文化の世界観

琉球の異世界が海の彼方に存在するのに対して、大和の異世界は主として天上にあるとされる。両者の信仰空間の違いを対象とした研究では、琉球では眼前に海が広がるのに対して大和では山が広がるため、生活空間の違いが信仰空間の差を生み出すと指摘されている<sup>29)</sup>。つまり、琉球弧の島々では山に登ると海洋が一面に展開し、天空が扁平水平上となって海と一つとなるために、沿岸国や海洋国では水平的・平等的な横の思想が形成されやすく、琉球文化と大和文化の異世界は水平観念なのか垂直観念なのかの違いが両者の民俗行事にも表れるといわれる<sup>30)</sup>。

このような奄美文化の世界観の一例として、福島は秋名集落の祭祀を対象に考察した結果、南島の潮間帯を中心とした「同心円的世界観」を指摘した<sup>31)</sup>。「同心円的世界観」は外来文化や宗教を取り込み、山や海などが周縁部で強調され分化されることによって象徴的・二元論・三元論の世界へとなっていく（図11）。特に二元論的世界観は平瀬マンカイのように現実世界と異世界を対象とした祭祀の際によくみられる。つまり、奄美文化の世界観は水平観念に基づく二元論的世界観であるといえる。さらに、琉球文化圏ではシマを単位とした社会が形成され、それを基盤とした特有の文化も多い。特に奄美諸島は山がちな地形なので集落間移動が容易でないため各集落の住民にとってはシマ＝自己世界という世界観がより形成されやすかったともいえる。したがって奄美文化の世界観の一面を端的に言えばシマ文化の影響を強く受けた二元論的世界観であるといえる。

29) 仲松は嘉味田の「…琉球は遙かに小さく、一歩出ると海がすぐそこに広がるのに、本土では、山国ともいうべき多くの山嶽がそびえたっている。…ニライ神の信仰から彼らを道祖神・山神などの信仰へ駆りたてる度合いは、琉球のそれどころではない」との指摘を踏まえ、想念・観念・概念形成にも自然地理的環境は大きい影響をおよぼすと指摘している。前掲3) 110-119頁。

30) 前掲3) 110-119頁。

31) 福島義光「奄美・秋名シヨッチョガマの儀礼構造——潮間帯の民俗としての象徴——」日本民俗学159号、1985、1-21頁。

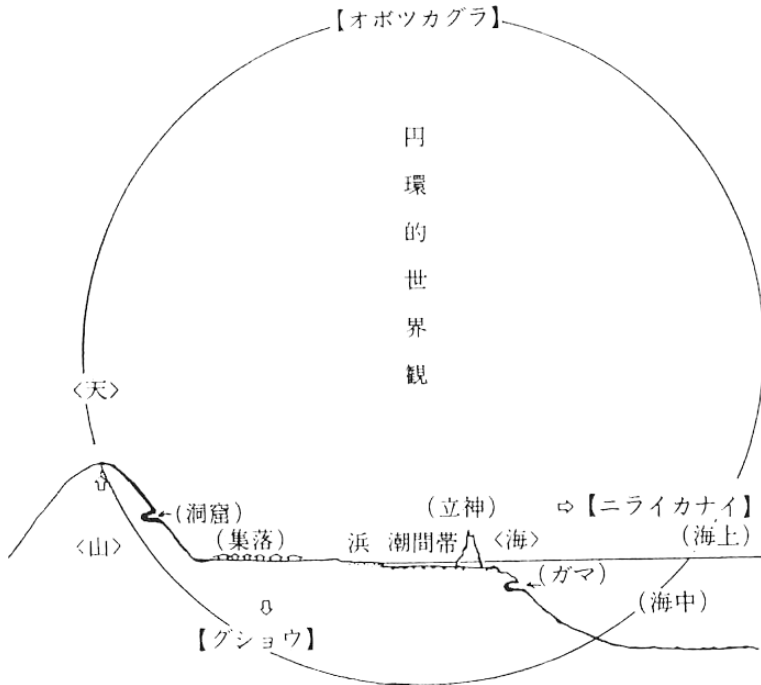


図11 南島の同心円的世界観（福島1985より引用）

## V. 終わりに

本稿では龍郷町内の3つのシマを事例に集落の空間構造と聖地・妖怪出没地の分布を確認してきた。奄美諸島は琉球王府による統治が長かったこともあり、琉球文化の影響が強いといわれる。今回、3つのシマの伝統的な聖地分布の調査でも、琉球文化の特徴の一つであるノロや、それらにかかわる聖地を数多く確認することができた。しかしその一方で、琉球の聖地としてよくみられる御嶽の名称は確認できなかった。御嶽は「腰当」思想の基盤となる最も重要な聖地の一つで、祖先崇拜の象徴ともいえる。今回の調査では御嶽の名称は確認することができない代わりに、いわゆる神山として崇められている場所には人骨埋葬の伝承、またはそれを類推させる伝承が残っていた。さらに、グスクと呼ばれる小字が墓場として機能している事例もあった。したがって、奄美諸島では神山やグスクと呼ばれる小字空間が御嶽と同様の役割を果たし、「腰当」思想の基盤となっていたといえるだろう。

ノロ関連の聖地はいつ頃に成立していたのか。集落祭祀を司ったもともとの祭祀者<sup>32)</sup>が琉球王府のつくりあげた神女組織に組み込まれて以後、奄美本島では2人の大阿母知良礼を頂点として、ノロによる祭祀がおこなわれていた。奄美諸島が1611年に薩摩に帰属した後は、琉球文化払拭のために幾度かの廃止政策があったが、19世紀に記された『南島雑話』には未だノロによる祭祀がみられ<sup>33)</sup>、ノロ祭祀は少なくともこの時期までは各地でおこなわれていた。さらに『ノロ調査資料』では明治2(1872)年の段階でノロが存在していたことを確認している<sup>34)</sup>。よって、各地にみられるノロ聖地は琉球王府が奄美の一部を統治し始めた15世紀から、ノロがいなくなる19世紀頃までに成立したものと考えられる。

ノロは基本的に古くからの有力者である特定家系の女性が継承するため、その聖地は集落の空間構造の歴史からみても重要な位置を占める。本稿で調査した3地区の中で、ノロ住居が聖地として確認できたのは秋名・幾里地域のみであったが、秋名・幾里地区のノロ聖地は里とアガレに多くあり、伝承による2つの集落の統合と海岸部への集落拡大を裏付ける結果となった。さらに、奄美特有の聖地ミヤーとノロ聖地を比べると、ノロ聖地が集中する里とアガレにはミヤーはない。よって聖地形成の経緯からいえば、少なくとも秋名・幾里地区ではミヤーの成立はノロ聖地の成立より遅かったといえるだろう。

さらに龍郷町の聖地の特徴的な点はいくつかの伝統的な聖地が平家伝説由来の空間として置き換わっている点である。これは本来、伝統的な聖地、または畏怖される空間として認識されていた場所が長い時を経るに従い本来の意味が忘れられ、平家伝説に組み込まれた結果、平家に関する聖地や怪異空間と認識されたためであると考えられる。つまり大和文化と琉球文化の2つの文化の邂逅が、琉球文化を基盤とする平家伝説という独自の奄美文化を創出させたといえる。

妖怪出没地と集落の空間構造から3地区の妖怪出没地を大別すると集落周縁部、隣接集落との境界、聖地の3点に区分でき、特に集落の周縁部には多くの妖怪が出没していた。その分布は何を示しているのか。佐々木は各地にみられるクビナシウマ伝承の文法に焦点を当て、伝説の作者は個人でなく集団であって、怪異が見られる場所を選択しているのは特定の社会集団で

32) 琉球地域の集落はもともと祭政一致社会であり、祭祀は血縁集団の中核となる宗家から根人・根神と呼ばれる人物が輩出されておこなわれていた。宮城栄昌『沖縄のノロの研究』吉川弘文館、61-73頁。

33) 南島雑話の神事に関する項では「能呂久米女祝主神之祭…」とあり、未だノロによる神事がおこなわれていた状況を記している。前掲13)。

34) 中山盛茂・富村真演・宮城栄昌『のろ調査資料』ボーダーインク、1990、365-368頁。

あることを指摘した<sup>35)</sup>。つまり、奄美諸島の集落境界付近に妖怪が出没する事例では、現われる妖怪の種類よりも妖怪が出没する場所がより重要といえる。それはどのシマ社会でも集落の境界が行政界としてのみならず、現実世界と異世界の境界空間と認識されていたことを示唆する。

さらに、異世界との境界空間は集落の周縁部にのみ存在するわけではない。今回の調査対象集落の一つ大勝集落のケンムン出沒地は一見すると点在するようにみえる。しかし、その分布を面的に捉えるとかつての川筋上に出現地は点在していた。一般にケンムンは住民の持つ生活空間と非生活空間の狭間である集落周縁部に現れることが多いが、集落内の川筋にもケンムンが出没していることは、住民が川筋を現実世界と異世界の境界空間として認識していたことを示す。また秋名・幾里集落では互いに道路で繋がりあう聖地同士で怪異伝承が残っており、住民意識の中の異世界空間は集落周縁部のみでなく集落内部でも一定の面的空間を持ちつつ認識されていたといえる。そのような社会集団意識が葬儀の際に決まった道を通るなどの禁忌にも繋がっているのではないだろうか(図12)<sup>36)</sup>。

筆者らは龍郷町の石敢當を調査し、その成果をすでに報告した<sup>37)</sup>。石敢當は邪気の直進を防ぐ目的で街路の突き当たりに設置される。この調査では町内の石敢當も概ねその原則に適っているのを確認できたが、石敢當自体の数は少なかった(表2)。さらに、調査過程では多くの住民が石敢當の設置を認識していないことも明らかとなった。

石敢當と妖怪伝承はともに住民が抱く世界観の表象であり、そこには社会集団の様々な認識が内包される。例えば、石敢當は古代地理思想の表現と捉えられ、そこには地域差が現われる。首里城下町では1町あたり平均22個の石敢當があるのに対して<sup>38)</sup>、龍郷町では1.3個とその差は大きい。この違いは文化の伝播過程の差異や、石敢當に対する認識の違い、あるいは大和文化の影響がより強いからとも考えられ、そこからは様々な要因を読み取ることが可能である。

石敢當が少ないのに対して、龍郷町では妖怪伝承や境界帯での祭祀など民俗事象が数多く残っている。その要因は新たな道路整備が進んだとはいえ、未だ交通が容易とは言い難い古くからの地形的制約と、交通が容易でないゆえに各シマ固有の地域性や民俗環境が現在でも残っているためであろう。つまり住民を取り巻く自然・民俗環境から生まれた「集落外は異世界であ

35) 前掲8) 35-50頁。

36) 秋名・幾里集落では「ウレランハマンジョ」と呼ばれる街路があり、葬儀の際にはこの道を通って浜辺に降りることはできない。

37) 高橋誠一・松井幸一「奄美大島龍郷町の集落と石敢當」, 東アジア文化交渉研究第3号, 2010, 359-394頁。

38) 那覇市内における筆者らの調査による。関西大学地理学教室実習調査報告書(29)『那覇市とその周辺の地理』2004。



図12 ウレランハマンジョ

表2 集落別石敢當の数

集落名	1980年	1990年	2009年
秋名・幾里	3	2 ( 2 )	2
嘉渡	1	2 ( 1 )	3
円	1	2 ( 1 )	2
浦	1	1	0
大勝	0	0 ( 2 )	0
中勝	0	4 ( 2 )	2
戸口	1	2 ( 2 )	1
屋入	1	1	1
赤尾木	2	3	1

( ) は調査時に現存しない石敢當の数  
1980年は龍郷町誌、1990年は久永氏の調査による。

る」という認識が現在でも残っているために他地域に比べて集落境界帯に多くの民俗事象がみられるのである。

聖地や妖怪伝承は社会集団が異世界空間を強く意識した結果生まれた異世界観の表象である。同様に境界帯でおこなわれる祭祀も特定の社会集団が自己の世界とは異なる異世界を想定しておこなうもので、両者ともに自己世界と他世界に対する強い意識が内在している。さらに、境界空間では単に社会集団の内面的な意識が可視化されるだけでなく、民俗行事や妖怪を通して



感覚的・実体的なものとして現れていた。そこでは本来なら不可視で実体のない社会集団意識と住民との接触が実物的に可能であった。このような社会集団意識に自己意識が内包されるような環境が、シマ社会では集落＝自己世界という認識、ひいては集落社会に対する帰属意識や集落のアイデンティティーの構築に繋がっていると考えられる。

このような集落社会の構築および住民意識の形成は龍郷町に限られるわけではない。琉球文化圏に含まれる伝統的なシマの自然環境はよく似ており、集落形成の思想も琉球地域では「腰当」思想を基盤とするなど同様であるため琉球地域では幅広く同様の空間認識と住民意識の形成があったと考えられる。そこにはより琉球文化の影響を受けたものや、大和文化の影響を受けたものが混在する。それらシマ社会での文化と住民意識を検討することは今後の課題としてい。